物語（フィクション）は、既に始まっている。

これは、虚構（メタ）という罠である。

赤い街で青を叫ぶ

著・赤井　京子　その他
現代語訳・南風　こまち

『まもなく、目赤、目赤、お出口は右側です。営団丸内線をご利用のお客様は、地上の連絡通路をご利用下さい。目赤の次は、ＫＱ赤羽橋です』

写真集から目を上げる。

（**赤い月、廃駅の上に**）

（**戦隊モノのリーダーはレッドって相場が決まってんのよ！！**）

図形の余韻が頭から、波のようにざわめきながら引いていく。ちょうどページをまたぐ直前だ。きりが悪い。後ろ髪を引かれるように栞を挟み、鞄にしまう。

他の乗客たちに追い出されるように火車を降りる。火車はファソラシドレミファソーって変な音を立てながら去っていった。

喉が渇いた。

目赤。変な地名だ。目黒や目白があるからそこまで変ではないのかもしれないが、あまり気持ち良くない地名だ。目を赤くした人が多かったのだろうか。

改札を抜け、エスカレーターで地上に出る。地上に出ても、すぐに空は拝めない。デソツーとかいう会社の建物がでかい顔をしているからだ。

アーケードに入り、動く歩道に身を任せる。横をどんどん人が早歩きで追い抜いていく。鞄にしまった写真集を引っ張り出し、栞を挟んだとこを開く。

歩道が動くにつれ、建物の影から少しづつ離れていく。それに合わせるように、薄白い本のページが、ほんのりと赤く染まっていく。

ばん。ぱん。ぱらん。ぱらぱら、ばらん、ばぱん。

（**雨に濡れた苗色の車体が艶やかだ**）

図形の余韻と共に、また写真集から目を上げる。

雨だ。

赤い、雨だ。

＊　　＊

雨が赤くなったのは、随分と前の話らしい。いつからなのかは知らない。雨の中に細かな粒粒がまじっていて、それが赤の原因らしい。アカネねーちゃんは旧ヤーパン政府、現ニポン連邦政府から赤葉書を受け取り、強制的に調査団に組み込まれ、そのまま行方知れずだ。子供もいたのに。アスカって名付けるんだって、あんなに楽しみにしていたのに。今は捜査も打ち切られた調査団から送られたわずかなデータをもとに浄水器が製造されたが、それでも赤を取り除くのには多大な労力が必要になる。そういえば、スザクばーちゃんがよくこんなことを言っていた。

「昔の街はね、白黒だったんだよ。それがこんなになっちまって。塗り潰されたんだよ、全く」

雨が赤くなってからというもの、濡れるもの全てが赤く染まるようになった。人も、物も、街も。具体的な原因ははっきりしていないが、専用の機械に水を通したら、ちゃんと透明な水になる。赤い水は、大量に摂取すると、赤痢とかに似た病気が初期症状として現れる。赤い水が蒸発した赤い霧とか、赤い水で育った農作物とかを口にするとか、それくらいなら問題ない。

喉が渇いた。

遠い昔、この国はジパングとかいう国だったらしい。滅亡したという。古代文字の解読がほぼ不可能らしく、遺された資料は多けれど原因はよくわかっていない。**赤字**とかいう形をした文字らしきものを、大学の赤井教授がひねくり回していたとか、アキタにーちゃんが昔言っていた。少なくとも、今のこの国の侵略でないことは確か……らしい。

古代文字。さっきまで開いていた写真集にもたくさん

出ていた。今使われている文字の遠い遠い源流らしいが、それが文字だとしたら、全く読めない。もしかしたら、意味のない単なる模様なのかもしれない。それすらも分からない。古代ニポン文明は、現代国家ヤーパンと似たような文明を築いていたらしいが、古代文字のデータはなぜかほとんど残っていない。どの発掘現場でも、出てくるのは四角いぽちぽちがびっしりとついた板の化石ばかりだ。分かりそうな人、第一人者の赤井教授が死んでからだいぶ経つ。

赤い雨を飲み過ぎると死んでしまう。いや、消えるといった方が正しい。死体を調べようにも、雨とは異なるどろりとした赤い液体になってしまい、衣服くらいしか後に残らない。その赤液と呼ばれるものも、すぐに固形化して、どこかに行ってしまう。赤井教授もそうやっていなくなった。

赤死病と呼ばれるこの病は、そういうわけで、遺体の解剖もままならない。ただ幸いなことに、簡単な対処法が確立している。清潔な透明水をがぶ飲みする。それだけ。症状もわかりやすい。全身に少しずつ圧迫感を感じ、息が詰まる。溶ける直前になると、腹部に異常な激痛が走るという。どう異常なのかを聞き出す前にみんな死んでしまう。最末期症状だ。アキタにーちゃんのように。

それ以前に、清潔な透明水さえ普段から確保できていれば赤死病にはかからない。そう、確保できればの話だが。

赤い雨が、また街を染める。

＊　＊

問題は飲み水だ。

透明水は政府が全量を管理し、均等に国民に配給される。いや、されないから赤死病がはびこる。透明水を生成する機械の会社とか、政府の役人とか、どこをどういう経緯でかは知らないが、とにかく水の配給がまともになされないのだ。だから赤い水を飲むしかない。異を唱える者は……どうなのだろう。知らない。知らされない。

車内モニターに首相動静が流れる。

『……赤松首相は『超小町２０便』で秋田から帰京し……』

『赤坂、赤坂です』

動静が打ち切られ、丸内線が政府の最寄り駅に着いた。

透明水が無いなら、作ればいい。

実力行使だ。

私は喉が渇いたんだ。

＊　＊

もう我慢できない。

自販機で赤い水を買う。飲めば飲むほど、渇きの代わりに息苦しい。

透明水は高い。そして揃いも揃って「売切」の赤ランプが踊っている。

まるで見る者を蔑みあざ笑うように。

＊　＊

アキタにーちゃんはもう溶けてしまっただろう。家を出るときは、もう「へそが痛い！」って喚いていたから。家から少し離れて、赤物横丁駅に出る頃には何事もなかったかのように静まりかえっていたから。

わたしはひとりぼっちだ。

地上出口には、二人の衛兵。

「止まれ！」

止まるもんか。鞄の奥底からてつはうを出し、レバーを引く。赤錆に包まれたそれには、TOKAREVって模様がある。

ぱん！　ぱん！

じめっぽい雨をかき消すような渇いた音。脳と心臓に撃ち込むのは、赤い雨を凍らせた弾。じきに赤い雨が体中に回るだろう。時間稼ぎくらいにはなる。

衛兵を踏み越え、外に。傘なんて知るか。赤山一丁目まですぐだ。そこに浄水工場がある。

赤い雨が、また私を打つ。

＊　＊

この連邦国家では、紫が最高位を表す色だという。当然、そんな色の服など私には無い。着ているのは政府関係者くらいだ。

「いたぞ！　あの青い服の少女だ！」

噂をすれば、紫服の人がぞろぞろ。

「工場を狙っているのか？」

答える義理は無い。とにかく私は喉が渇いたんだ！

「何とか言え！」

知るか。こっちは息が詰まって死にそうなんだよ！

「構わん。放水隊、構え！」

何、放水銃？　かかってこい。私は喉がカラカラだ。水なんて怖くない。どうせなら全部飲み干してやる！

私はてつはうを相手に撃ち込んだ。赤錆の塊が手元で弾け、焼けるような痛みが手を襲う。

痛い。叫びたい。でも、喉が渇いて、息が詰まって、もう声が出ない。

「発射！」

放水銃から赤い水がほとばしった。

＊　＊

世界が赤く、そしてだんだんと暗く染まる。

お腹が痛い。とんでもなく痛い。中から何かがはちきれそうだ。

「あああああああああああああああむぐっ、んんん！！！」
喉を突き破る声は、口に突っ込まれた放水銃でふさがれる。痛みと抵抗でもがくも、押さえつけられる。銃身で歯がぼきりと折れる。
「そのまま赤い水を飲ませろ。もう末期だ。とどめを刺せ……ん？」
ごきゅごきゅと喉を赤いうねりがこじ開ける。
息ができない。
「紫の服……貴様のような輩がそんなものを許されると思っているのか！　衛兵！　この小娘の服を剥ぎ取れ！」
顔が思い切り踏みつけられたような気がしなくもないが、もう体中が痺れて何も分からない。ぼやけた視界に、辛うじて紫から脱皮させられる赤白い全裸が分かる。
「あば……嬢ちゃ……っつ……」
喉が渇いた。
水を。

＊　　＊

「ふえ、ふえっ、ええん」
「あらあら、モミジちゃん。もうおかあさんのおっぱいがほしいのでちゅか～？」
「ふええ、あぐ、うぐ」
母親は娘に母乳を含ませる。赤ん坊は、ひたすらにしゃぶる。ホクロのある頬が少し膨らむ。
「はいはい、いっぱい飲むんでちゅよ～。……よっぽど喉が渇いていたのかしらねぇ」
「いやあ、一時はどうなるかと思ったが、モミジもカグラも無事で良かったよ」
「アカギさん……」
「ずっと集中治療室の前ですたんばっていましたもんね」
「あらまあ。どうせ暇だからって、綾瀬でも読んでいたんじゃないの？」
「だからアカネの時は悪かったてば」
母親は看護師の言葉に笑い、父親もつられて笑う。父親は目が赤かった。血まみれになって産道から出てきた愛娘とその愛妻とを、双眸に思い浮かべている。
「アカネもアスカもアキタも、みんな外で待ってる。京急と丸ノ内線は乗り換えが楽じゃないから、大変だったろうな」
「ええ、連れてきて」
夫は病室の外に消えた。
「ぷあ」
「ん？　モミジちゃん、もういいの？」
赤ん坊は母乳から口を離す。
引き戸から家族が続々と入る。病室に家族が揃い、そろって赤ん坊をのぞき込む。
「ベビー服持ってきたよ」
「ありがとね、アカネ。あら、それ青じゃないの」
「紫もあったけど、何か違うってアキタもアスカも」
「だって……」
「ほらほら、アスカもそんなにすねないの」
「あ、でもモミジ、笑ったよ、ほら」
「本当。気に入ったみたいね。アキタ、着せるの手伝って」
「うん、ああ、こら。動いちゃダメだってば、モミジ」
青いベビー服にすぐに興味を失った赤ん坊は、窓の外が気になるようだ。
「だー、だぁー」
「んー？　ああ、あれ？　窓の外の？」
窓の外の景色は、雨に打たれてけぶっている。
「あれはね、雨っていうのよ」
窓の外に植わっている青紅葉に雨粒が煌めいた。

訳者注
この文書は京急線高架化工事の現場、現在の青物横丁駅付近で発掘されたものである。炭素解析の結果、この文書は約１０億年前のものとされ、人類有史以前の存在である可能性が指摘されている。しかし、古文から現代文、方言、専門用語に至るまでの過去に存在したいかなる日本語でも記されておらず、遺伝的アルゴリズム解析手法をスーパーコンピューターで日本語に応用して現代語訳を果たしたものである。様々な分野・知見から科学的・学術的研究がなされているが、数多くの矛盾も、依然として作者（筆跡鑑定から複数と考えられる）の正体も、フィクションにしてはあまりにも現実との連関が深い内容についても未解明な部分がほとんどである。
なお、これ以外にも多数の文書が出土しており、そちらについては現在も解読作業が続けられている。

ボーナストラック　産道

作者不詳
現代語訳・南風　こまち

狭い。
狭い。
苦しいよ。
赤のすみっこで。
私と私じゃないものの間で。
私は必死にもがく。
行ったり来たり、もがく。
遠い先に光が見える。
赤い輪郭の白い光が見える。
「ほら、こっちだよ」
誰？
近すぎて見えないよ。
「こっちこっち」
「おいで」
みんな……。
ねえ、みんな……。
どうして私を置いていってしまったの？
遠すぎる誰かに、私は。
「コラ、そっちじゃないよ」
「こっちにおいで」
「全ての真ん中から、ぼくたちのところへ」
うん。
わかってた。
私が最後だったんだよね……。
「さあ、いこう」
赤の世界。
みんなみんないなくなった、あの赤い街。
夢みたいに。
朧みたいに。
だんだんうすれていく。

光の先に、みんなが待ってる。
会いたかった、みんなが。
はなれたくなかった、みんなが。
ねえ、みんな。
わたしにも見せて。
いろんなものをみせて。
わたし、みたいよ。
ひかり。

おぎゃあああああ！！
おぎゃあああああ！！

モミジが生まれた。
緊張の世界は、安堵と歓喜の世界に変わった。
モミジ、君は幸せと喜びを作ったんだよ。
大げさに言うと、世界を変えたんだよ。
モミジがそれを知るのは、もう少し、大きくなってからかな。
生まれてきてくれて、ありがとう。

訳者注
この文書についても、未だ未解明な部分が数多い。一部の現代ポップカルチャーの専門家はRADWIMPSの曲、『バグッバイ』との連関を指摘しているが事実関係は不明である。